中国電影大觀

玲玲の電影日記(夢影童年/ELECTRIC SHADOWS)

2006(平成18)年5月22日鑑賞〈東宝試写室〉

……今や中国映画の市場拡大は著しいが、文化大革命の時代(1966年~1976年)には、「野外映画館」が大はやり……。女優の夢を断たれた美しき主人公の娘、玲玲も大の映画好き。しかし、転校生の悪ガキとともに過ごした幸せな日々は長く続かず、時代の波の中、さまざまな葛藤と不幸な出来事が……。母と娘、そして悪ガキ坊主による「映画」を通じた人間模様が、1972年生まれの女性監督の手によって情感豊かに綴られていく。『活きる』(94年)ほどのダイナミックさはないものの、中国現代史の学習にも最適。

■新人女性監督に注目!

この映画は、小 江が自分自身の子供時代に体験した野外映画館の記憶をもとに、3年の月日を費やして脚本をつくり、監督初作品としたもの。小江は1972年生まれで、北京電影学院の監督科修士号を取得した才媛らしい。

そして、この監督第1作は、2004年、2005年と各国の映画祭に出品され絶賛されているとのこと。「中国映画大好き人間」の私としては、陸 川や賈 樟 柯など「第6世代」監督に続く、「第7世代」ともいうべき、こんな新たな才能にも注目しなければ……。

舞台は? 主人公は?

この映画の舞台は、中国西北部の田舎町の寧夏。主人公、江 雪 華 (姜 易 宏) は、有線放送の花形アナウンサーだけに (?)、人民服を着ているものの、一般の労 働者階級の人たちとは少し違う雰囲気があり、何よりも美人……? したがって、おばさんたちからはいつも羨望の眼差しで……。それもそのはず、シュエホアの夢は、戦前の大スター、周 嫌のような女優になること。そのため、彼女は地元の劇団に参加して演技や歌・踊りの練習をしていたが、一般の労働者階級のおばさんから見れば、彼女の踊りは特権階級的かつ反革命的……?

したがって、花形アナウンサーとして収まっている間は後ろ指を指されることはなかったが、ある男性と恋に落ち、その人の子供を身ごもっていたシュエホアは、「1972年2月、ニクソン大統領とその夫人が、本日、文芸の夕べに招かれ、革命現代バレエ『紅色娘子軍』を鑑賞した。周恩来首相は同大統領夫妻に同伴してバレエ上演を鑑賞した。バレエ鑑賞に同伴したのは、そのほか国務院外交部文化……」という重要な放送をしている中、突然つわりに襲われたため、急遽レコードに切り替えようとしたが、とっさのあやまりによって革命歌ではなく、周 璇の反革命的なレコードをかけてしまったから大変……。

たちまち彼女は「反革命」のレッテルを貼られ、花形アナウンサーの職場から追放されてしまった。

文化大革命時代における、寧夏のまちの人たちの楽しみは、野外映画館で上映される映画の鑑賞。文革時代に上映される映画は、ほとんどが中国革命のために闘う人々を誉め称える革命映画だが、時々は当時中国と友好関係にあった北朝鮮とアルバニアの映画も……。

そういえば、『小さな中国のお針子』(02年)でも、四川省の鳳凰山という山中に下放されたマーとルオが村長から命じられたのは、まちへ行って朝鮮映画『花売り娘』を観て、村民たちにその物語を語り聞かせるようにということだった。そして、「お針子」を同じ映画に連れて行った2人は、「また同じ映画だと村長が知ったら、次から来られない」ため、2人が創造した映画の物語を村民たちに語ったが、その舞台はアルバニア。そこから面白い光景が展開されるのだが、その評論は『シネマルーム5』(294頁参照)で……。

今日は、そのアルバニア映画『死すとも屈せず』の上映の日。シュエホアはスクリーンに登場する美人革命家の姿に見入っていたが、そこで突如陣痛を起こしたから大

変……。会場が大騒ぎとなる中、病院にかつぎ込まれて生まれた女の子が、発発 (關 曉 彤) だった。しかし、時は文化大革命の真っ最中。「結婚もしていないシュ エホアが出産するとは何とふしだらな!」「生まれてきた子供の相手の男は誰か白状 しろ!」とつるし上げ集会にかけられたが、彼女は決して逃げていった恋人の名前を 口にすることはなかったため、遂に住居までも奪われることに……。

響そんなシュエホアを見守ったのは……?

そして、そんな母親の血を受け継いだ発発は映画が大好きな少女に育ち、いつもこの母娘2人はパンの野外映画館を訪れていた。そんな中、次第にパンとシュエホアの距離は親密に……。

響とんでもない悪ガキの登場だが……

病院のシーツの洗濯の仕事をしながら、玲玲と2人での落ち着いた生活を取り戻したシュエホアだったが、そんな中、玲玲のクラスに毛小兵(王正佳)という、とんでもない悪ガキ(?)が転校してきた。といっても、所詮は子供。彼の悪ガキぶりは、父親からの虐待によるものだとわかった玲玲とシュエホアは、いつの間にかられまだ。 小兵と仲良くなった。そして、小兵も居心地のいい玲玲の家に住みつくようになり、いつしか玲玲とは兄妹のような関係に。

2人はいつも一緒に遊び、一緒に本を読んでいたが、2人の最大の楽しみは貯水塔のてっぺんから「魔法の双眼鏡」で大好きな映画を観ること。この魔法の双眼鏡で遠くを見れば、どんな映画でも観ることができるというのが小「兵の説明だったが、



その後の玲玲は最悪

夢のような時期は過ぎて、小兵は父親に連れ戻されたうえ、祖父母の元に送られることに……。他方、遂にシュエホアはパンと結婚することになった。そこで問題は、シュエホアとパンの間に男の子ビンビンが生まれたこと。すなわち、これによって父親と母親の愛情はいつしかビンビンに集中……。でもないのだが、多感な時期を迎えた玲玲(張 懿 靖)にとって、こんな事態はまさに想定外。

ところが、弟のビンビンは、小さいくせに(?)意外としっかり者……? そんな ひどいお姉ちゃんの仕打ちを両親に告げることをしなかったため、玲玲も心を入れ 替えることに。

そして、今日は、テレビが急速に普及してきたため遂に野外映画館が閉鎖される日。 その最後の日に大変な事件が発生。それは、受験勉強のため映画を観ることを禁止さ れ、外から鍵をかけられていた玲玲を、ビンビンが工夫して外に連れ出したまでは良かったのだが、2人が一緒に見ていた貯水塔のてっぺんから、ビンビンがあやまって転落死してしまったこと。呆然と立ち尽くす玲玲を、怒りのあまり殴りつけたパンだったが、その激しさのあまり、玲玲は聴覚を失うことに……。そして、玲玲は失意の家出……。その後、両親がいくら玲玲を捜しても彼女を発見することはできなかった……。

■毛大兵とは……?

映画の冒頭、長いナレーションとともに、北京で自転車に乗って水の配達の仕事をしている毛大兵(夏南)の姿が登場する。「北京では水道水に毒が入っていると思っているのでは、と思うほど水がよく売れる」というナレーションは、公害問題がどんどん深刻化している今の中国の姿を見ると、冗談に聞こえないから少し不気味……。彼の趣味は映画を観ることだが、映画を1本観るのに4日分の給料がかかるらしい。私が中国旅行で見聞したところでは、今の中国の映画館は10元(150円)程度だが……?

今日も仕事の帰りに急いで映画館に行こうとしていた彼は、道に積まれたレンガに 自転車のハンドルをとられて転倒。起き上がったところ、突然目の前に現れた美しい 女性 (齋中・暘) が、レンガを1つ拾い、いきなりこれで大兵の頭を思いきり殴りつ けてきたからたまらない。大兵は頭から出血したまま気を失い、やっと気づくと今 はベッドの上。

一体、俺の身に何が起きたのか……? なぜ、あの女の子は俺の頭を殴ったのか……? やっと意識を取り戻した大兵に対して、警察官からいろいろと質問されても、それは「俺が聞きたいコト」……。警察署で取り調べを受けている若い女の子のところに行って問い詰めるものの、彼女からは何の返事もなし。それどころか、逆に家で飼っている金魚にエサをやってくれと書かれた紙と鍵を渡される始末。こりゃ俺のことをバカにしているのかと思いつつ、鍵を開けて部屋に入ってみると、そこはまるで別世界……? この毛大兵こそは、あの毛、小兵の成人した姿……。

業 僕を殴った女性は、一体誰……?

この部屋の中は、まるで映画館。部屋の中央には映写機があり、白い大きなスクリ

ーンも。そして、壁一面はポスターだらけだし、映画のフィルムと映画雑誌がいたるところにうず高く積み上げられていた。「こりゃ天国だ。あの女の子がしばらくここに帰って来なければ、1日中映画を観ることができる」と思った大兵だったが、そこで発見した日記をパラパラとめくっていくうちに、アッと驚くことに。そこに綴られているのは、紛れもなく小学生の時に別れてしまったあの玲玲のその後……。なぜ玲玲は今北京に……? そして、なぜ玲玲は俺の頭を……?

しかし、警察官からは「あの娘は精神療養所に収容され、面会は禁止になっている。 病状が改善したら会えるだろう」という冷たい言葉だけ。そこで、仕方なく部屋に戻った大兵がベランダに出て発見したのは、玲玲と別れる時、彼女にプレゼントした あの魔法の双眼鏡。その双眼鏡は、すぐ直下にある家に向けて固定されていた。双眼鏡を覗いた彼がその中に発見したものは……?

■あの時代、この時代……

これ以上のネタばらしはやめておこう。念のため若干の整理をしておけば、シュエホアが玲玲を生んだのは1972年で、小兵が転校してきたのが1979年頃。そして、傷心の玲玲が家出をしたのが1980年半ば。さらに、今は大兵と名乗っているあの悪ガキが、北京で玲玲と運命的な「再会」をしたのはその約20年後。

中国ならではの時代状況の下、映画を通じてつながった人たちの心温まる物語をじっくりと味わいたいものだ。

さらに、映画ファンなら同時に、玲玲や小 兵が魔法の双眼鏡で観ていた『馬路天使』や『鉄道遊撃隊』などの映画にも興味を持つとともに、パンフレットにある、藤井省三氏(東京大学文学部教授)の「現代中国の原風景―野外映画館『シネマ大世界』が映し出す清く美しき時代」という、かなりマニアックな中国シネマ論も、しっかりと勉強したいものだ。

2006(平成18)年5月23日記